

各関係機関長 様

佐賀県農業技術防除センター所長

イチゴうどんこ病、ハダニ類の防除対策の徹底について

イチゴ苗において、うどんこ病、ハダニ類の発生が増加傾向にあります。これらが苗で発生すると、本圃定植後の多発生につながるため、発生圃場では早急な対応が必要です。また、現在、発生を認めない圃場においても今後注意が必要です。

つきましては、下記を参考に防除対策を徹底してください。

記

【うどんこ病】

1. 発生概況

- 1) 9月2日～7日に実施した育苗圃(苗)での調査において、発生圃場率は25%、発生株率は3.7%(平年5.3%、前年10.4%)であり、平年よりやや少なく前年より少なかったが、8月下旬の調査時に比べ増加している(図1)。
- 2) しかし、発生株の病斑(標徴)は新生展開葉にみられ、上位葉の感染が拡大しつつある(写真1)。
- 3) また、8月中旬以降、平均気温が平年より低い日が続いており、本病が発生しやすい条件となっている(図2)。

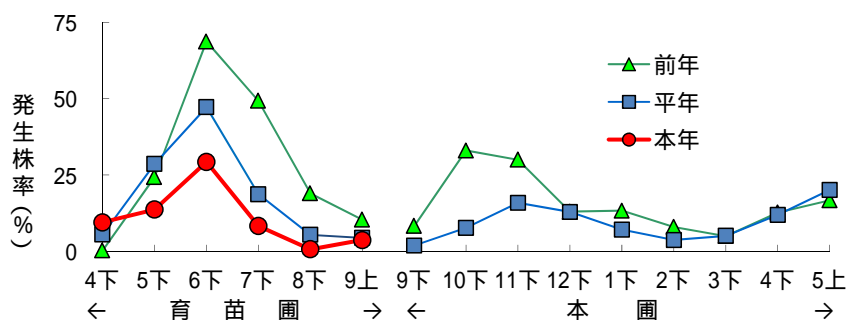


図1 イチゴうどんこ病の発生株率の推移(県内12圃場調査)

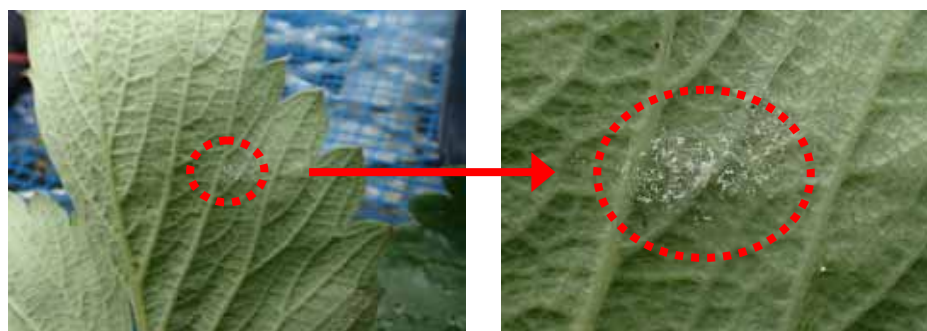


写真1 今回、育苗圃で認められた病斑(左)とその拡大写真(右)

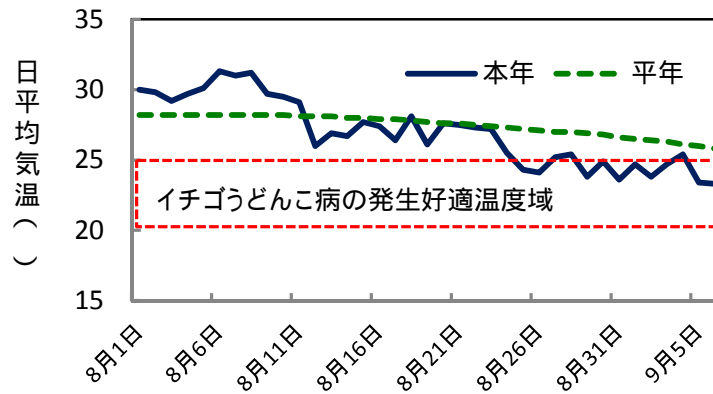


図2 8月以降の日平均気温の推移(佐賀市)

2. 防除対策

1) 定植前

- (1) 苗は十分な間隔を置いて並べ通風を図る。
- (2) 苗での発生を抑えるため、下表を参考に約10日間隔で薬剤防除を実施し上位葉の感染を抑える ([H25年度佐賀県農業試験研究センター研究成果情報](#))。

表1 育苗後期の薬剤防除によるイチゴうどんこ病の発病抑制効果(2011年 農業試験研究センター)

散布間隔	発病小葉率(%), (防除値) : 薬剤防除						
	8月17日	8月31日	9月6日	9月12日	9月21日	9月30日	10月9日
10日間隔 薬剤防除	DB	S	DB	MB	DB		
	0.0	0.0	0.0 (100)	0.0 (100)	0.7 (95)	0.5 (97)	0.5 (98)
30日間隔 薬剤防除	DB			MB			
	0.0	0.5	0.5 (89)	9.0 (35)	11.1 (24)	13.0 (26)	9.3 (68)
無防除	0.0	1.4	2.3	13.9	14.6	17.6	29.2

注) 供試株は2011年7月上旬に発病を確認し試験開始時に停止型標徴のみが認められるものを供試, 12株/区, 数値は2反復の平均値, S: イオウフロアブル1000倍, DB: サンヨール500倍, MB: ラリー水和剤4000倍.

2) 本圃定植後

- (1) 活着時～頂花房開花前までが重点防除時期である。約10日間隔の薬剤防除により葉での発生を抑え、その後の花、果実への伝染を抑える ([H21年度佐賀県農業試験研究センター研究成果情報](#))
- (2) ビニル被覆期頃から12月頃までは、10～14日間隔で薬剤防除を行う。さらに、硫黄粒剤のくん煙処理(3時間/1日以内)を併用すると有効である。 ([H21年度佐賀県農業試験研究センター研究成果情報](#))
- (3) 軟弱徒長株は本病が発生しやすいため、適正な肥培管理を行うとともに、ビニル被覆後は温度管理に注意する。

3) 防除薬剤

- (1) 薬剤防除は系統が異なる薬剤を組み合わせる計画的に行う。
- (2) アフェットフロアブルに対する耐性菌による防除効果の低下を防ぐため、育苗圃から本圃終了までの本剤の使用は1回にとどめる。
- (3) その他の防除薬剤については、県病害虫防除のてびき 194～196頁を参照する。

【 ハダニ類 】

1. 発生概況

- 1) 9月2日～7日に実施した育苗圃(苗)の調査において、発生圃場率は80.0%であり、8月下旬(54.5%)に比べ増加した。また、現時点での発生株率は10.7%(平年9.9%、前年8.0%)で平年及び前年並であるものの、8月下旬(7.6%)に比べやや増加した(表2、図3)。

表2 イチゴ苗でのハダニ類の圃場別発生状況

調査時期	圃場毎の発生株率(%)												発生圃場率(%)	平均発生株率(%)	平年の発生株率(%)
	圃場No.1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
前回 (8月20～24日)	8	8	0	36	0	0	8	4	0	-	20	0	54.5	7.6	12.8
今回 (9月1～2日)	32	8	0	16	32	12	4	8	8	8	0	0	80.0	10.7	9.9

注) -: データなし。

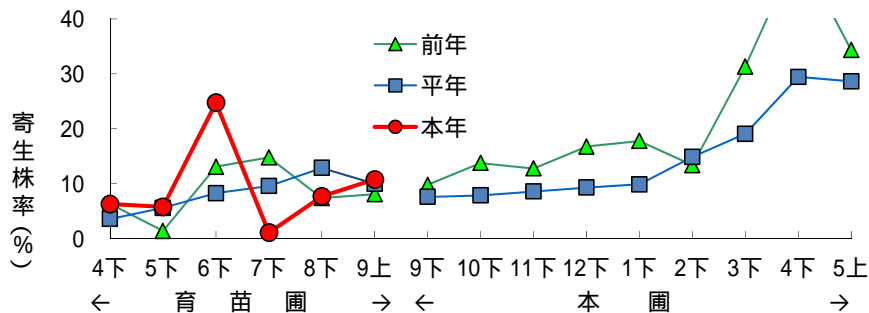


図3 イチゴでのハダニ類の発生株率の推移 (県内12圃場調査)

2. 防除対策

1) 定植前

- (1) 圃場によっては薬剤感受性が低下した個体群が発生しているため ([H26農業試験研究センター成果情報](#))、防除効果の低下がみられる薬剤の使用は控え、抵抗性発現の可能性が低い気門封鎖系薬剤(粘着くん液剤等)を利用するなど、薬剤の選定に注意する。
- (2) ハダニ類は薬剤がかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、葉裏や下位葉にも薬液がかかるよう、十分量を丁寧に散布する。

2) 本圃定植後

- (1) 薬剤のみでは栽培期間中の被害を抑制することが困難な場合もあるため、天敵(カブリダニ類)と有効薬剤を用いた体系防除を行う ([H18およびH21年度佐賀県農業試験研究センター研究成果情報](#))。
- (2) 農薬の選定にあたっては、天敵やミツバチへの影響を十分考慮する。
- (3) 詳細は県病害虫防除のてびきP204-205参照する。